

ベールの裏の真実：イスラームにおける女性の地位の真実 (1/3)



イスラーム的ベール、つまりヒジャーブは、ムスリム女性の身体を覆う、ゆったりした派手ではない衣服のことを指します。それはキリスト教においてマリア（彼女と彼女の息子に平安あれ）が着ていたとされる伝統的的衣服と基本的には同様のもので、修道女もそれに倣った格好をしているものの、ヒジャーブは極端主義の象徴として、またムスリム女性の社会的に低い地位を表すものとして取り沙汰されます。ムスリム女性を性的対象のみとしか見ない者は、教養のある、または専門職に就く「自由な」欧米女性たちがイスラームに改宗している事実には愕然とします。女性改宗者たちは「ベールで目隠しされた」洗脳被害者の狂信者である、または抑圧されており自由になることを待ち望んでいるなどといった言いがかりはもはや通用しません。ただし、現代の後進的社会における扇情的な人々や、政治的な動機を帯びた報告では、未だネガティブな固定概念だけが強調されています。では、イスラームとキリスト教双方のベールの役割を比較することによって、イスラームにおける女性の地位について簡潔に見ていきましょう。

“誰でも善い行いをし（真の）信者ならば、男でも女でも、われは必ず幸せな生活を送らせるであろう。なおわれはかれらが行った最も優れたものによって報奨を与えるのである。”（クルアーン16:97）

以下からも見られるように、「新約聖書」の一部とされるようになる、女性によるベールの着用といった慣習をパウロは義務付けました。

“女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪の毛をそり落

としたのと同じだからです。女が頭に物をかぶらないなら、髪の毛を切ってしまいなさい。女にとって髪の毛を切ったり、そり落としたりするのが恥ずかしいことなら、頭に物をかぶるべきです。男は神の姿と栄光を映す者ですから、頭に物をかぶるべきではありません。しかし、女は男の栄光を映す者です。というのは、男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです¹。だから、女は天使たちのために、頭に力の印をかぶるべきです。”（第一コリント人11:5-10）

三位一体論を最初に体系的に提唱したテルトゥリアヌスは「処女へのベール」という著書において、それを家の中でも義務付けています。“乙女よ、あなたがたは道端でベールをまとうのだから、教会でもそうしなさい。あなたがたは他人といるときにそれをまとうのだから、兄弟たちといるときもそうしなさい。”

イスラームはベールを開発したのではなく、単に推奨するに過ぎません。パウロが男性の権力の象徴としてもベールを利用したのとは対比的に、イスラームはそれが単に信仰・謙遜・貞節の象徴であり、信仰ある人々を性的虐待から守るものであると明記します。

“預言者よ、あなたの妻、娘たちまた信者の女たちにも、かの女らに（外出時は）長衣を纏うよう告げなさい。それで（立派で貞節な信仰者として）認められ易く、悩まされなくて済むであろう。”（クルアーン33:59）

19世紀の東洋学者、リチャード・バートン卿はこう記しています。

「彼女らの名誉に貢献する制限を望む女性たちは（ベールを）進んで許容し、愛着感さえ抱いている。彼女らは女性らしい礼儀や気配りといった概念とは矛盾する、独立、いや放埒というものを望んではいない。彼女らは情婦のようにおおよけの目線に自分を露出させる夫についてひどい嫌悪感を抱く。」

事実として、ムスリムのベールとは、女性の崇高な地位を表す一つの側面に過ぎません。その地位とは、彼女に課された多大な責任を反映するものです。一言で言えば、女性は正しい社会を作り上げるための最初の教師です。それゆえに、人に課された最も重要な個人的義務の中に、母親に対する感謝の念、親切さ、そして良き処遇があるのです。預言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）はこのような受け答えをしています。

“「神の使徒よ。私が入々の中でも最も良く接すべき相手とは誰でしょうか？」預言者は答えました。「あなたの母親である。」男は尋ね

ました。「その次は誰でしょうか？」預言者は言いました。「あなたの母親である。」男は尋ねました。「その次は誰でしょうか？」預言者は繰り返しました。「あなたの母親である。」男は再度尋ねました。「その次は誰でしょうか？」預言者は最後にこう言いました。「あなたの父親である。」”（サヒーフ・ブハーリー、サヒーフ・ムスリム）

良き処遇においては父親よりも母親が優先されているものの、イスラームはキリスト教同様に、神は男性が一家の主として定めたのであると説いています。

“・・・女は、公平な状態の下に、かれら（夫）に対して対等の権利をもつ。だが男は、女よりも一段（責任において）上位である。”（クルアーン2:228）

イスラームにおいては、男性の権威は社会的・経済的責任²と比例するものであり、それは神が双方の性別に設けた精神的・身体的な相違を反映した責任なのです。

“男は女と同じではない。”（クルアーン3:36）³

結婚とは、双方の性別が相違を埋めることのできる手段ですが、それは相互補助・相互利益に基づいたものです。

脚注：

¹ イスラームでは神は男性ではなく、男性（と女性）の創造主であると説きます。また神は双方の性を高潔な目的のもと創造されています。“ジンと人間を創ったのはわれに任せさせるため。”（クルアーン51:56）

² それゆえ、ムスリム男性は女性よりも多くの額の相続が認められています。彼は法的に一家の女性たちを皆、自分の富によって扶養する義務があるものの、女性の富は女性個人のものであり、消費・投資・貯蓄などの使用目的を問わず彼女の自由に使えるのです。

³ フランス人ノーベル賞受賞者のアレクシス・カレル博士はこの点に関し、次のように述べてより強固なものとしています。「男女間に存在する相違とは、性器の形・子宮の有無・妊娠の不可・学歴などから来るものではない。それらは身体全体に及ぶ、より根本的な問題である。・・・それらの根本的事実への無知から、男女同権論（フェミニズム）の推進者たちは双方の性別は同じ力と責任を持つべきであると信じ込んでしまっているのである。事実問題として、女性は男性とは極めて異なる。彼女の身体のすべての細胞は、彼女の性別の特徴を宿している。彼女の器官も同様であるが、とりわけ彼女の神経系ではそれが顕著である。生理的法則は、人間の願望によって取って変えられるようなものではない。我々はそれをありのまま受け入れる必要があるのだ。女性は男性的な性質を模倣しようとすることなく、自らの性質に則ってその素質を発達させていくべきなのである。」(Carrel, Man and the Unknown, 1949:91)

“またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう（取り計らわれ）、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある。”（クルアーン30:21）

「それが席卷したのがどこであれ、イスラームの魅力はその単純明快さにあります。それは初歩的で理解しやすく守りやすい規則への従順さを求める代わりに、心の平穩という最も希少価値のある素晴らしい見返りをもたらします。その規律性、安全性、確信は性的寛容な社会の渦に飲み込まれた女性たちに訴えかけるものがあります。それらの女性たちの家族は、母子家庭における父親の欠如といった、両親のいる家族制度の崩壊によって弱体化させられています。そして大半の社会においては、家庭において子どもたちの間に宗教性を維持させるのは女性なのです。」(Peter Hitchens, Will Britain Convert to Islam? Mail on Sunday, 2/11/03)

“かの女らはあなたがたの衣であり、あなたがたはまたかの女らの衣である。”（クルアーン2:187）

性行為そのものは、イスラームにおいてタブーではありません。逆に、合法的な性関係は喜捨行為とさえされます。元修道女の著名学者、カレン・アームストロングはこう著しています。

「ムハンマドは明らかに、女性たちが性的に汚れていたと考えてはいなかった。彼の妻が月経中だったとき、彼女に膝枕をしてもらっていたし、彼女の手から礼拝用の敷物を受け取っていたし、教友たちにこのようにも伝えていた。『あなたの月経は、あなたの手にある訳ではないのだ。』また彼は同じ器から飲み、こう言っていた。「あなたの月経はあなたの唇にある訳ではないのだ。」一部のムスリム国家において、性犯罪者に対し厳罰が下されるのは、性意識が重要視されており、その理想が貶められたからであり、欧米社会のように性意識が嫌悪されているからではないのだ。」(The Gospel According to Woman, 1986:2)

キリスト教会が正当化する男性の権威は、ユダヤ教から相続されたものです。それは、女性が本質的には邪悪であるという概念の上に成り立っています。バイブルによれば、サタンはイブをそそのかし、神に背かせて禁じられた木の実を食べさせ、彼女はアダムを誘惑して一緒に食べさせました。その不服従について神がアダムを叱責した際、アダムはイブのせいにしたため、神は彼女を非難しました。

“神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する。」”（創世記3:16）

イブは欺き、誘惑する女という悪いイメージが、ユダヤ教・キリスト教の双方における負の遺産となりました。元々、反キリスト教のユダヤ人だったパウロは、バイブルにこう記しています。「**女性は静かにし、完全に従順であることを学ぶべきである。私は、女性が男性に教えること、または男性に対して権威を持つことを許可しない。女性は沈黙していなければならない。アダムが最初に創造され、イブは次だったのである。そして騙されたのも、罪人になったのもアダムではなく、女の方だったのであるが、女性は妊娠することにより救済されるのである。**」（第一テモテ2:11-5）[1](#)

イスラームの女性観は劇的に異なります。クルアーンでは天国の逸話においてはサタンのみが欺瞞者であったと明確にし、不服従についてはアダムとイブの双方に同等の責任があったとします。そこには、イブが最初に禁じられた木の実を食べた、または彼女がそうするようアダムを誘惑したという僅かな示唆すらありません。アダムとイブはどちらも罪を犯し、神の赦しを請い願い、神はそれを認めたのです。

“かれら両人は言った。「主よ、わたしたちは誤ちを犯しました。もしあなたの御赦しと慈悲を御受け出来ないならば、わたしたちは必ず失敗者の仲間になってしまいます。」”（クルアーン7:23）

言語学的に、クルアーンで用いられる用語の「子宮」と「慈悲」は同義語となります。なぜなら、イスラームにおける出産は、懲罰としてではなく、神による祝福の一つと見なされているからです。また、神が無実の者に災いをもたらすという概念は神への冒瀆に他なりません。キリスト教ではすべての新生児は罪人であるという考え方をもってはいるものの、イスラームではすべての子はフィトラの状態、つまり神を信じる天性の高潔な状態と共に生まれ、無実かつ無罪であると説きます。それゆえ、イスラームの改宗者は、元来の宗教に帰教した者と言われます。子供の周囲の悪い環境や養育により、彼らは反逆的な罪人に転向されてしまうのです。

“「悪事を行った者は、それと同じ報いをうけます。だが善行をする者は、男でも女でも信者なら凡て樂園に入り、そこで限らない御恵みを与えられます。」”（クルアーン40:40）

上記のパウロの言葉は、イブの罪が女性の知識習得の制限を正当化するためにも使われていることを示しています。しかしイスラームで

は、知識の探求において女性は男性と平等です。預言者はこう述べています。

“知識を探求することは、すべてのムスリム（男女）の義務である。”
（イブン・マージャ）

さらに、イスラームには聖職者は存在しないため、ムスリム社会において最も名誉ある地位は学者であり、預言者の妻アーイシャは教友たちの中でも卓越した知識人でした。それはイスラーム社会に影響力を及ぼすことの出来る女性知識人の例でもあります。

“「知っている者と、知らない者と同じであろうか。」
（しかし）訓戒を受け入れるのは、思慮ある者だけである。”（クルアーン39:9）

脚注：

1

(3/3)

残念ながらイスラームと関連付けられてしまう、強制結婚、女性器切除、（新郎ではなく）新婦による婚資の支払い、名誉殺人、強姦被害者の有罪など、イスラーム到来以前の慣行の復活は、植民地支配期の混乱による、一般のムスリムとその知識の源泉との断絶がきっかけでした。帝国主義の粛清による最初の犠牲者は、常にイスラーム学者の男女でした。しかしながら、クルアーンとスンナに照らし合わせることによって、イスラームにおける女性の真の地位に対する誤解は容易に氷解させることができます。さらに、イスラームは他のいかなる宗教よりも女性改宗者の数を増やしており、その割合は欧米改宗者全体の75%を占めています。「イスラームは女性を抑圧する」という欧米の偏見から見ると、非常に皮肉なことです。

「犯罪、家庭崩壊、薬物乱用、アルコール依存症などの増加により、自らの社会に失望する欧米人は、イスラームの規律と安全性に感嘆するようになりました。多くの改宗者は教会への不信感に幻滅し、三位一体論やイエスの神格化に不満を抱く元キリスト教徒です。」(Lucy Berrington, “Why British women are turning to Islam”, Times, 9/11/93)

それらの女性たちは、アビシニアのネグス王が改宗した原因となった同じ真実を認知したのです。それは、教友がネグス王に伝えた次の言葉でした。「神の使徒は女性について悪く言うことを禁じられた。」（イブン・ヒシャーム）

“無分別に貞節な信者の女を中傷する者は、現世でも来世でもきっと呪われよう。かれらは厳しい懲罰を受けるであろう。”（クルアーン24:23）

現在でも、多くの修道女や東方正教会、カトリック教会、近東やアフリカの教会の敬虔な女性信者はキリスト教式のベールをまといます。ムスリム女性もヒジャーブをまとうことにより、信仰心・謙遜さと神への奉仕を宣言します。彼女の近親、そして他の信仰者女性たちといった神の認可ある者たちだけが、彼女の身体的な美を直接目にすることができます。そうすることにより彼女は「私の身体ではなく、私の信仰によって私を評価してください。他の選択肢はありません。」と主張します。イスラームは、女性たちにとって長きに渡り無縁だった自由、尊厳、公正さ、保護を与えています。人類は次の言葉を残した預言者から、偉大なイスラームの伝統を受け継いだのです。

「あなたがた（男性）の内、最善の者とは自分たちの女性に最も良くする者である。」

キリスト教徒の女性たちは、ラビ・ユダヤ教やギリシャ思想から受け継いだ女性卑下の伝統の被害者となっています。こうした低い女性の地位や性的搾取は、欧米のフェミニズム運動につながったのです。

“男の信者も女の信者も、互いに仲間である。かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。また礼拝の務めを守り、定め of 喜捨をなし、アッラーとその使徒に従う。これらの者に、アッラーは慈悲を与える。本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。”（クルアーン9:71）

イスラームは女性に契約の権利、婚姻上の権利、相続権、離婚の権利、独立した財産の所有権、商取引を営む権利、対等の給料を稼いで受け取る権利、旧姓を保持する権利などを、欧米の民主主義社会が過去50年間、つまり20世紀においてようやく女性たちに与えた権利を、すでに1400年前に与えていたのです。事実、自由かつ無制限な妊娠中絶以外は、多くのフェミニストたちが依然として要求しているものをイスラームはすでに認可しています。現実には女性が男性を模倣するだけの、欧米スタイルの「解放」は、より弱い性別に対して実現不可能な要求を突きつけているだけではなく、女性らしさというものを無価値なものとししました。ベールをまとい、女性らしさに誇りを持つムスリム女性は、貞節さ、謙虚さ、尊厳の象徴であり、神への信仰心と献身性による多大なる報奨を期待することができます。そういった要素こそが、抑圧などではなく、真の解放なのです。

“本当にムスリムの男と女、信仰する男と女、献身的な男と女、正直な男と女、堅忍な男と女、謙虚な男と女、施しをする男と女、齋戒（断食）する男と女、貞節な男と女、アッラーを多く唱念する男と女、これらの者のために、アッラーは罪を赦し、偉大な報奨を準備なされる。”（クルアーン33:35）